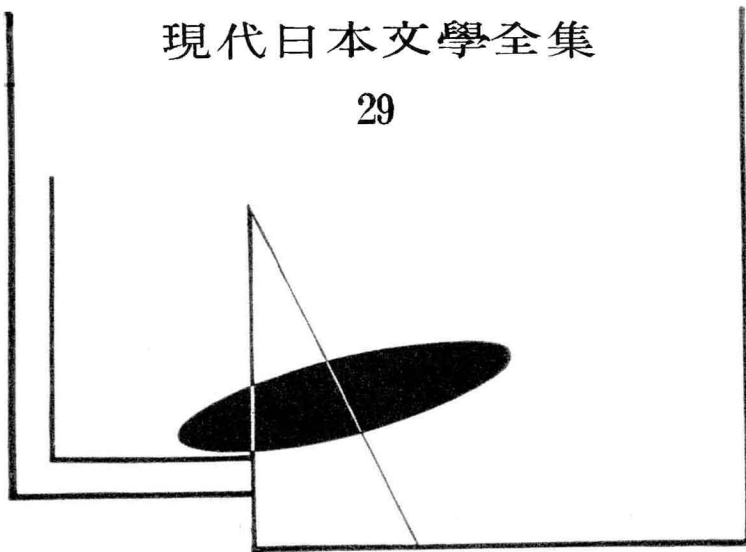


水上瀧太郎
久保田万太郎
集

現代日本文學全集

29



筑摩書房版

水上瀧太郎
久保田万太郎 集

昭和三十一年二月一日 印刷
昭和三十一年二月五日 發行

著者

水^{みな}上^{かみ}瀧^{たき}太^た郎^{らう}
久^く保^ほ田^た万^{まん}太^た郎^{らう}

發行者

古 田 晁

印刷者

山 田 一 雄

發行所

筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八
〔電話〕東京二九局(29)七六五(代表)
振替 東京 一六五七六八

製印整
木刷版
製製本株
式會社精
式會社興
社社

水上瀧太郎集 目次

大阪の宿	五	父となる記	三二
ベルファストの一日	六	親馬鹿の記	三四
果樹	七	「通夜物語」事件	三九
貝殻追放(抄)	二〇	切腹	三三
はしがき	二〇	人氣もの	三三
新聞記者を憎むの記	二六	老父歎	三五
女人崇拜	二三	獨逸皇帝萬歲	三五
はじめて泉鏡花先生に見ゆるの記	二七	指導者氾濫	三七
久保田万太郎集 目次		覺書	三九
末枯	二五	寂しければ	三四
續末枯	二六	春泥	三四

花冷え	三三	大寺學校	三三
市井人	三五	波しぶき	三六
うしろかげ	三〇		
水上瀧太郎 (小泉信三)	三七	解説	四二
久保田万太郎の人と作品 (河上徹太郎)	四三	年譜	四八

装幀 恩地孝四郎

水上瀧太郎集



□ いろいろ満員の電車から、珍らしくおとろろ

やとあふし、腰のやととたん、車窓のや

子はとりにあしたの

□ 今宜城奇通のやせりまふし

□ と呼ぶやと、ゆるい全

脱情紙礼さん

□ と怒馬の七胃がある。むつくりと

ると、揺幅のいり洋皿紳士、車中を脚腕し、

大阪の宿

一の一

夥しい煤煙の爲めに、年中どんよりした感じのする大阪の空も、初夏の頃は藍の色を濃くして、浮雲も白く光り始めた。

泥臭い水ではあるが、その空の色をありありと映す川は、水嵩も増して、躍るやうなざざ波を立てて流れて居る。

川岸の御旅館酔月の二階の縁側の簾椅子に腰かけて、三田は上り下りの舟を見迎へ見送つて居た。目新しい景色は、何時迄見て居てもあきなかつた。此の宿に引越して来て二日目の、それが幸なる日曜だつた。

三田は、大阪へ来て、まだ半年にしかならない。其間、天満橋を南へ上る、御城の近くの下宿に居たが、因業貪欲吝嗇の標本のやうな宿の主人や、その姉に當る婆さんが、彼のおひとよしにつけ込んで、事毎に非道を働くのに憤慨し、越して行く先も考へずに飛出してしまつた。大きな旅籠と、夜具蒲團と、机を荷車に積み、自分で後を押して、梅田の驛前の旅人宿に一時の寝所を定めたが、宿の内部の騒々しさに加へて、

往來を通る電車のきしり、汽車の發着毎にけたましく響きわたる笛の音、人聲と穿物の三和土にこすれる雑音などが、外部からひた押に押し来て、部屋障子が震へる程で、机にむかつて本を讀んだり、かきものをしたりするおちつきを與へて呉れなかつた。それでも半月は辛抱した。人にも頼み、自分でも會社のゆきかへりに方々見て廻つたが、扱て恰好のうちは無い。氣に入つたところは宿料が高く、安いところは氣に入らなかつた。つい氣のおちつかないまま、夜は宿を出てうろつき廻つた。

そんな時に足をやすめる場所は、關東煮がおきまりだつた。懐中の都合もあり、カフェは蟲が好かないので、自然と大鍋の前に立つて、蛸の足を噛りながら、こつぶ酒をひつかける事になる。天神橋の蛸安は、前の下宿時代からの深い馴染だつた。

「何處かに、安くて居心地のいゝ下宿屋は無いかしら。」

「うっぱい、機嫌で、若い主人に訊いて見た。」

「安うて居心のえゝ宿屋だつたか。」

眞面目にとりあつてゐるのか、ゐないのか、腰の煙草入から煙管をぬいて、悠々と烟を吹きながら、お義理らしい小首を傾けた。

「大將。」

先刻から大分酩酊して、居睡をささうになつて居た汚ならしいぢいさんが、いきなり横あひから聲をかけた。

「安うて居心のえゝ宿屋やつたらな、土佐堀の

酔月や。」

厚ほつたい唇をなめながら、鍋の上につんのめりさうな形だつた。少し舌が長過るのか、酔つて居る爲めにもつれるのか、ぢいさんのいふ事は聞取りにくかつたが、要之その酔月といふ宿屋は、きれいで静で安くて、食物は上等で、おかみさんも女中も親切で、これ程居心地のいいうちは無いと云ふ意味の事を繰返して喋つて居るのだつた。

三田は酒のみの癖に酔拂が嫌ひなので、何を云はれても取合はなかつたが、酔月といふ名は忘れなかつた。そして、翌日會社の歸りに土佐堀の川岸を順々に探して行つて、此の家を見つけたのである。

普通の宿泊料ではやりきれないので、男のやうな口のきゝ方をする大柄のかみさんに談判して、月極にして割引いて貰ふ事にした。

「よろしゅおまつ。うちは儲けようと思ふて御商賣してるのとは違ふさかい、まあ来て見とくんはなはれ。」

活氣のある聲でからから笑つて、先方から話をうち切つた。

次の日、三田は又大砲と夜具と机を積んだ荷車の後を押して引越して來たのである。

一の二

昨日は荷物を部屋に運び終ると、直ぐに御影に住む友達、田原の家によばれて行つた。酒倉のうちつゞく濱端の一地點に建てられた二階家

の欄干に近々と浪が寄せて、潮の香の鼻をつく座敷で、夜の更ける迄酒を飲んだ。大阪に歸つたのは十二時過ぎで、引越して来た最初の晩に宿のおもての戸を叩かなければならなかつた。

それにも拘らず今朝は早く起きた。雨戸の無い家はあけ安く、縁側の玻璃戸の内側に引いてある白いカーテンは、川水に光り躍る朝日を反映して、まぼしかりかつた。深酒の翌朝の早起は、自分自身に對しても負嫌で押通す三田のならばしだつた。

梯子段をづしんづしん踏鳴らしながら降りて行くと、

「お早う御座います。」

「お早うっさん。」

二三人女の聲が、臺所と帳場から、いちどきに挨拶した。新來の客を珍しがる視線を避けるやうに、彼は地下室へ急いだ。

暗い湯殿に續く洗面場には、ひゞの入つた姿見がかゝつて居た。三田はその前に立つて、これが一生の面倒に思はれる無類の濃い髯を剃つてゐた。安全かみそりの齒の音が、心地悪く響いた。

「且さん、えら早よおまんなあ。」

湯殿の洗場をこしこし洗つて居たぢいさんが、後から聲をかけた。

「お早う。」

半分は石鹼のあぶくだらけの顔で振向いて返事をしたが、

「おゝ。」

平べつたい顔を見ると、おもはず驚きの聲が出てしまつた。

「何やら見覚えのあるお方のやうに思ふてました。且さんでしたか。先夜はえらいひつれいしました。」

しまりの無い口のきゝ方に特徴のあるぢいさんは、此間天神橋の蛤安で、安くて居心地のいい旅館酔月を、教へて呉れた酔拂ひだつた。「なあんだい、君は此のうちの人のなにか。」

「へえ、時折手傳ふてゐまんのや。」

ぢいさんはにたにた笑を浮べて、寧ろ得意さうに答へた。

顔を洗つて二階へ戻ると、きれいに寢床はかたづいてゐて、縁側のカーテンをしぼり、玻璃戸をあけ放したところに、籐椅子が据ゑてあつた。それに腰かけて、朝日のさす對岸の家や、川の流や、上り下りの船を見て居たのである。

しばらく辛抱してゐた天満橋を南へ上る、御城の近所の下宿に比べて、月に十圓違ひではあるが、その差は十圓以上と思はれた。最初にあつたおかみさんのからりと晴れた態度と、因業貪欲吝嗇の内心を、ねちねちした御世辭で包んだ先の下宿の人間に比べて、いかに心地よく思はれたか。あの下宿では、女中に給金を拂ふのを惜んで、何時も手不足で困つてゐたが、此の宿には女手も相當にあるらしい。獨身者のなら

ひととして、その女中がきれいであつてくれればいゝがと、蟲のいゝ事も願つて居た。

斯ういふ明るい部屋ならば、屹度物を書くの

にもいゝに違ひ無い。かねて腹案は熟し切つて居る長編小説を、いつそ今日から書始めようかしら。會社から貰ふ月給だけでは、宿料を拂つて餘裕が無いのだから、小説を完成させるのは、財政上からも必要に迫られて居るのであつた。彼は、自分自身を鞭撻するやうに、初夏の青空に向つて深呼吸をした。

一〇三

「お待ちど、うさま。」

廊下の方から、上草履の音をさせて、女中が御膳を運んで來た。

「うちの御客さんは皆さん寢坊なのに、あなたは御早いんですね。」

「月給取はふだん寢坊して居られないので、つ癖になつて、折角の日曜にも早く目が覺めてしまふんですよ。」

三田は籐椅子から腰をあげて、部屋の中かの膳についた。

「昨夜は大變遅かつたんですね。御友達のところに行くといつてらつしやつたけれど、女の御友達のところまで引とめられて御歸りになれないのぢやあないかと思ひました。」

「あゝ、おもての戸をあけてくれたのは君だつたかねえ。」

それをきつかけに、部厚な膝の上に御盆をのせてひかへて居る相手の顔を見た。ひどい癖毛を銀杏返に結つた、面皷の痕の満面にはびこる、くりくり肥つた、二十六七には確かなる女だ

つた。何處にひとつ取柄の無い女だが、その面
 麴面が始終にこにこ笑つてゐる。いかにも人が
 よささうで、且きりやうのよくないのが、面と
 むかつて居てもひげめを感じないで、氣安かつ
 た。

「東京はどこらです。あたしも東京に叔母さん
 があつて、行つてた事があるんですよ。」

「僕は麴町。」

「あたしの叔母さんは本所。もつとも今では萩
 窪とかに越しちまつたさうだけれど。」

三田は齒が悪いので、米の飯を喰ふ事は不得
 手だつた。相手はもつと口をきいて貰ひ度いら
 しいのだが、彼はうっかり口をきくと飯粒がこ
 ぼれさうなので、一生懸命でもぐもぐ噛んでゐ
 た。

「あたし、生れはいちごなんですよ。」

きかれもしないのに、生れ故郷まで持出して
 話をつづけた。

「へえ、越後かい。どつりてい。とえの區別が無
 いと思つた。」

「あらやだ。すつかり直つたつもりでゐたけん
 ど、矢張りいけないかねえ。」

みそつ齒の口を惜氣も無くあけて、たまらな
 く面白さうに笑つた。

「東京に二年、伊豆の方にも行つてゐたし、靜
 岡にもゐたし、大阪にもこれで滿一年半になる
 んですよ。女中奉公はしてゐるけれど、それで
 も國になんか歸り度いとも思ひませぬねえ。田
 舎はふんにとやだやだ。」

「そんな事を云つたつて、國には君の歸るのを
 待つてゐる人があるんだらう。」

「あらやだよ。あたしなんか家を飛出して來ち
 やつたんですよからねえ。」

たうとうおもふつぼにはまつたと云ひ度さう
 な満足の顔をして、身の上話を始めた。

酒こそ飲むけれどおやぢは善人で、酌婦上り
 の後妻の尻に敷かれ、その後妻は一家の權力を

握つて横暴の振舞ひが多く、殊に繼子の自分を
 邪魔にしていぶめるので、ゐたゞまれなくなつ

て逃出したといふのである。

よくあるやつさといひ度さうな、興の乗らな
 い相手の態度には頓着無く、額際を汗ばませて
 喋つた。

元來無口の三田は、つとめて相槌を打たうと
 は思ふのだが、結局つきあひ切れなくて、黙々
 として二ぜんめの御飯を丹念に噛んでゐた。

「もうよろしいんですか。」

「僕にはどうしても飯粒の味がわからないん
 だ。」

一仕事済ませたやうな顔つきで箸を置いた。

「飯粒だなんて、罰が當りますよ。」

睨んで置いてから、又みそつ齒をあからさま
 に笑つた。

「よろしゆおあがり。」

わざと大阪言葉を眞似して、眞赤な舌を出し
 た。

一四

女中が行つてしまふと、思ひ立つたが吉日だ
 と、三田は直ぐに机にむかつて、新しい原稿紙
 をひろげた。彼は會社員として衣食して居るの
 で、ほかの作家のやうに十分時間を持つて居な
 いから、止むを得ず眞夜中にも筆を執らなけれ
 ばならないのであるが、ほんとは朝の光が好き
 なのである。眞白い肌に艶を持つて、ほのかに
 脂肪の浮いてゐるやうな紙の上に、一字一字自
 分の文字の並んで行くのは氣持がよかつた。此
 の分だと、一日十五枚といふ今迄の最高記録を
 破つて、二十枚三十枚四十枚も書けるかもしれ
 ない。それを新聞社に賣つて受取る金高迄、淺
 ましくも想ひうかべた。

けれども、その進行は間も無く妨げられた。

川にむかつた縁側と、その反對側の廊下を、女
 中達が掃除し始めたのである。騒々しくばたば
 たする上草履の音は、高々と端折上げて太股も
 あらはに四這になり、頭よりもお尻を高く持あ
 げて眞一文字に廊下を蹴つて行く姿を、まざま
 ざと想像させる。

「御免やす。」

不意に目の前に、想像通りの姿が現はれた。

やさしくて、ほがらかな聲だつたが、濡雑巾を
 手にして立上つた姿は、たつぷり上背もある肥
 大なものだつた。あんこの澤山入つてゐる大東
 髪を手拭でつまんでゐるが、その手拭の下に僅
 かにあらはれてゐる細い目と、低い鼻と、不釣
 合にちひさい口が、一齊に笑つてゐた。淡紅色
 の腰巻の下から、ずんどの足がぶよぶよと波を

打ちさうに見えた。しかし、その皮膚は、小田原蒲鉾に似て、氣味の悪い位白かつた。

「あんさん、うちのおつさんに聞いて御越しやしたんやつてなあ。今、階下で話してはりましたん。天神橋の蛸安で逢ふたんやと、こない云ふてなあ。」

これも人のよさうな笑顔で、へだての無い口をきいた。

「おつさんていふ人は、あれは此のうちの何をして居る人？」

三田は止むを得ず洋筆を置いて、成る可く淡紅色の腰巻より上に視線を保ちながら、相手に對した。

「おかみさんの御母さんの兄さんかいな。弟さんかいな。」

獨言のやうにいひながら、首をかしげて考へてゐた。

「ふうむ、あれが。」

あんな汚らしいおぢいさんが、此のうちのおかみさんの母親の兄弟かと、意外に思つた。

「あのおつさんべろに酔拂つて、土佐堀の酔月の廣告をしてゐた。うちが綺麗で、靜かであつたらわ

「しようむない。おつさんは御酒あがつたらわややわ。」

口ではさう云つたけれど、矢張笑つてゐる。笑の外に表情の無いやうな顔であつた。

「あんさんもたんと上つてだつか。」

「先づたんとの方だらうねえ。」

「ほしたら御晝に一本つけましょか。」

「晝は喰べない。僕は二食だ。」

「へえ、二食？」

聲だけは驚いても、矢張表情は笑つてゐた。

「そんなら晩に御酌させて貰ひまつさ。」

「僕は御酌されるのは嫌ひだ。手酌で無いと折角の酒がうまくない。」

三田は正直にほんとの事を云つただけけれど、

相手は冗談として受取つたらしい。

「おやおや、えらい嫌はれ様。」

目も鼻も口もいつしよにして笑つたが、ばたりと雑巾を縁に落すと、四這になつて、小田原蒲鉾の足を忙しく動かしながら、するすると遠くへ行つてしまつた。

一の五

「おい、人が寝てゐるのに、ばたばたしてやましいぢやあないか。」

突然、一間置いて向の部屋から、冗談らしく怒鳴る聲がして、障子のあく音が續いた。三田の部屋が東の端とすると、その部屋は縁つどぎの西の端になる。

「えらい濟みませんなあ。」

と正直に詫びてゐるのは、優しくてはがらかな聲だつた。

「なあんだ、おつぎさんか。氣がきかないぢやあないか。犬に喰はれて死ぬがいゝや。」

わざとでは無いかと思はれる程太い聲の男は、縁側に出て來た氣配だつた。

「えらい悪おましたなあ。」

もう一度託言葉を繰返したが、今度のは相手の調子に合せた冗談めかしたものだつた。

「大貫さん、あんだ何時か知つてはりますの。」

「九時頃かい。」

「阿呆らしい。十一時だつせ。お日様が笑ふてゐやほりまんがな。」

からかひながら、一段と上草履をばたつかせて、もう一度三田の部屋の方へ、四這になつて拭いて來る。

「なんだいその恰好は。さかりのついた豚みたいだ。こう、まるでかうだぜ。」

「いやあ、大貫さん。」

悲鳴をあげて、三田の鼻さき迄逃げて來た女の足下に、薄禿の頭を突出して四這になつて居る男があつた。浴衣の尻をくるりとまわつて、

越中褌をまざまざと見せたのが、ひよいと顔をあげるると三田の視線にぶつかつた。

「いや、こりやあ失敬。」

あわてて立上つて、頭を掻きながら姿を消した。

「なんだい、お客さんがあるのか。昨日迄あいてゐたぢやあないか。」

と、自惜らしく誰かに云つて居るのが聞えた。

「さあ、大貫さんも顔でも洗つてらつしやい。」

とお客さんは、階下で御化粧最中ですよ。」

と云つてゐるのは越後女の聲だつた。

男は顔を洗ひに行つたのであらう、直ぐに越後女は縁側へ出て來て、誰憚らぬ聲でおつぎに

話かけた。

「いやんなつちやふねえ。さつさと起きて呉ればいいのに、何時迄たつたつて片づきやあしない。あの看護婦さんも看護婦さんぢやあないか。よく羞しくないもんだねえ。」

これも裾を端折つて、赤いものを見せた姿で、はたきを手に持つて居る。

「ほんまにいやらしいなあ。」

おつぎは相變らぬ笑顔で受けた。

「あんな部屋の掃除なんかしてやらないからいや。」

「あんな焼いてるのやないのんか。」

「何いつてるのさ。」

舌うちして、まるまると肥つた低いのが、背延びをして大女の背中をどやしつけた。そして二人とも、止度無く笑つた。

笑ひ止むと、二人が交々に、向の部屋の有様を、三田に話して聞かせるのであつた。

一の六

三番の御客大貫さんは、市内の某病院の醫員だつたが、院長の娘といふ仲になつたのである。養子になり、副院長として納まつて居たが、生來の女好で、患者に對して怪しからぬ振舞があつたとか、看護婦にも手を出したとか面白くない噂があつて、年中風波の絶間が無かつたが、最近に及んで又々一人の看護婦とくつき、今度のは相手がえら物なので騒動が大きくなり、養父の院長がかんかんに怒つてしまつ

たので、たうとう病院を飛出してしまつた。自分は酔月に宿をとり、保險會社の診査醫になり女は派出看護婦會に入つて働いて居るが、時々斯ういふ風に逢ひに来て、泊つて行くのだと云ふ話だつた。

「それに、をかしいのは奥さんだねえ。あんなやくぎな亭主に未練があつて、親達にかくれて逢ひに来るんだから。」

越後は三田の机のそばに坐り込んで、夢中になつて喋つた。

「それがなあ、晝日中でも、ちやあんと寢床とらせて、やすんで行かはりまがな。」

おつぎは自身羞しくなつて、まつかになりながら、一大事らしくつけ加へた。

「看護婦さんも看護婦さんだよ。女の癖によくも平氣で居られるもんだねえ。何時だつて、十二時頃迄あれなんだもの。あれで大貫さんみたいなのが色魔つていふのかもしれないねえ。男ぶりは悪いし、のんだくれだし、怒つぽいし……」

「禿ちやびんだし。」

かけあひで悪口を云つて、えへらえへら笑つた。

「叱つ。看護婦さんが戻つて來やはつた。笑ふたらあかんし。」

笑ひ止まない朋輩に手を振つて見せたが、肝心の自分は顔中笑つてゐる。

「あんな、一寸見て御覽なさい。」

越後は三田にさゝやいて、身を乗出して向の方をのぞいてゐる。

十分好奇心はあるにはあるのだが、顔を突出してのぞく丈の勇氣は無かつた。

「別嬪かい。」

と、てれかくしに云つてみた。

「さあ、別嬪いふ程の事もおまへん。なあ、おりかささん、あてやつたらお米さんの方がえゝ女子やと思ふが。」

「大貫さんに訊いて見なければわかないよ。兩手に花だもの。どつちもいゝつて云ふかもしれない。」

「大きい聲したらあかん。」

おつぎも大きなからだを部屋の中に運んで來て、暑苦しく變方から押合つて、二人は聲を忍びながら、全身を動かして笑つた。

もしもし龜よ龜さんよ

世界のうちでお前ほど

あゆみののろいものは無い

どうしてそんなにのろいのか

突然、縁側に出て居る看護婦であらう、讚美歌をうたふのにふさはしい細い聲で、幼いものの歌をうたひ出した。

「あなた、龜の子がゐてよ。」

「なに、龜がゐる。」

太い男の聲が部屋の中から應じて、これも縁側に出たらしい。その聲に誘はれて、おつぎとおりがが馳出して行つた。

「あらあら泳いでゐる泳いでゐる。」

「あんた、来てごらんさい。大きな龜が泳いでゐるんですよ。」

おりかは三田のところへ戻つて来て、促し立てる。龜の子よりも人間の方に興味を持つて、彼も誘はれるまゝに縁に出た。向ふの端の部屋の前に、先刻の男と並んで、宿の浴衣の胴中に、ちぎれる程伊達巻の喰ひ込んだ後姿を見せて、小柄な女が立つてゐた。欄干につかまつて半身乗出して見ると、目の下の川波にゆられながら、大きな泥龜が悠々と泳ぎ廻つてゐた。

一の七

三田の勉強心は妨げられてしまつた。ひとつ置いて向の部屋にゐた男女の、みだりがましい姿を想像すると、心はおちつきを失つてしまふ。最初の勢に似もやらず、夕方迄かゝつて十枚にも及ばなかつた。その癖すつかり疲れて、部屋のなかば迄もさし込む西日に辟易しながら、ぐつたりと疊の上に寝ころんでゐた。

「えらいお待遠さんで御座いました。」

夜食の膳を持つて来たのは、又別の女中だつた。三田は起上つて、大きな伸をした。長い間机にむかつてゐたために、肩が凝つてゐた。

「折角のお休に大層御勉強ですな。」

小ぢんまりと伶俐な顔つきの、十八九に見えるのが、素早く机の上の原稿紙へ目を走らせて、御愛想をいつた。

「濟まないが一本つけて来て下さいな。」

「御酒だつたか。」

凝つた肩を拳骨でやけに叩きながら、三田のうなづくのを見てつとて、素早く立つて行つた。ほつそりと姿のいゝ、川魚の感じのする女だつた。

問も無く酒が来ると、

「どうか置いて行つて下さい。僕はうまれつき獨身者の性分と見えて、手酌が一番勝手がいい。」

と三田は眞面目な顔つきで、頼むやうにいふのである。

「あてのお酌ではあきまへんか。」

「決してそんなわけでは無いけれど、お酌をされると、どうしても勤氣が出て、何ていつたらいゝかなあ、つまりもひとつ味ないんだよ。」

「よかつたな。」

むつつりと愛嬌氣の無い三田の口から、大阪言葉を真似したのが出て来たので、しんからをかしさうに笑つた。笑ふと金歯がきらきらした。

三田は親譲の酒飲で、これなくしては食欲の乏しさに憊む位だつた。まゝにならない下宿住居でも、晩酌だけはうまく飲み度いと念じて居た。何事につけても、他人に強ひられる事の嫌ひな性分で、お酌をして貰ふのを窮屈がるのも彼にとつては切なるものであつた。

しかし相手は全く冗談だと思つてゐて、黙つて引さがりはしない。

「まあ、そないな事云はんと、もひとつお酌させて貰ひまつさ。」

さういはれると、口数が少なく、且同じ事を繰返していふ事をしない三田は、つがれるまゝに飲む外は無かつた。

「あの越後の人はおりかさんで、もう一人の人はおつぎさんだね。君は何ていふの。名前を覚えて置かないと不便だから。」

「あてだつたか。米と申します。」

わざと切口上で答へて、叮嚀に頭をさげた。

「年辭は？」

「もうおばあちゃんだつせ。」

軽く首を横に振つて答へない。さういふ細かいところに、外の二人とは違つて、客商賣に馴れた人間の風情があつた。

「お米さあん。おゝい、お米さあん。」

ひとつ置いて向の部屋から、大きな聲で呼んだ。

「看護婦さんが歸らはつたので、御機嫌がわるおまんねせ。」

くすつと笑つたが、もうひとつお酌をして置いて、

「一寸御免やす。」

といふと、なほしきりに呼び立てる三番へ、小走にかけて行つた。

三田はとり残されて始めてゆつくりした氣持になつた。前の下宿とは違つて、手綺麗な料理で、酒も意外に結構だつた。手酌で飲んで、さつさと飯も濟ませてしまつた。

日が暮れると、對岸の家々の燈火が水に映つて、あたりの景色は一段と立勝つた。川風の涼

しい縁側の椅子に腰かけてゐると、三番でお米を相手にくどくどと管を巻いてる男の聲が聞えて来る。

「あれえ、わるさしたらあかん。」

どたんばたん採あぶ物音につゞいて、陽氣に笑ふ聲も聞えた。

三田は夜の空を仰ぎ見ながら、旅愁を感じてゐた。

二の一

御旅館酔月は嬉天下だつた。亭主はおかみさんよりも年下で、或る工業會社の事務員を勤め、宿屋の事には一切口出しをしなかつた。朝は早く出勤し、夜はおかみさんの相手をして晩酌の盃をなめるが、到底太刀打の出来る柄では無く、女房の酒の濟むのを待つて飯を喰ふと、少しの分量でも長く酔を保つ酒に負けて、ごろりと横になつていゝ氣持でうたゝ寝をする。極端なだんまりやで、止宿人と顔を合せても、軽く頭を下るばかりで、口をきく事は殆ど無い。會社の同僚とのつきあひも無く、飲んだり喰つたり、見たり聴いたり道の樂も無い。たつた一つ、此の人にしてと意外に思はれるのは花合で、三百六十五日札を手にしない日は無い。その方の仲間が集つて来ると、夜どほし勝負を争ふ事もある。さうで無いと、帳場をしまつて、湯に入つて、からだの樂になつたかみさんと、さしで遊ぶのがおきまりだ。

「あんた、二三年いきましましよか。そないして居

たら風邪引きまつせ。」

とおかみさんに揺り起される迄は寝てゐる。それから差向で十二時近く迄やつて居るが、亭主の方は勝つても負けても、うんともすんとも云は無いで、念入りで考へて札を打つ。おかみさんの方は勝つても負けても、一人ではしやいで喋つてゐる。猪の出るのは五段目やとか、ありがた山の時鳥とか、いづれあやめとひきぞわづらふとか、坊主まる儲けとか、出まかせな駄洒落を、年中繰返して居る。

おかみさんは、肉體的にも亭主を壓倒する力を持つて居た。胃弱者に見るやうな蒼黒い顔つき、細つこい亭主にひきかへて、がつしりと恰幅のいゝ、顔色も艶々して、造作もはつきりしてゐるし、男性的の聲はあけつ放しの性質そのまゝであつた。若い時には何處とかの新地に出て居たとかいふ事で、その面影は多少残つて居た。宿屋を始めたのは餘程前で、世話になつて居た人が死んでから、止宿人の一人と一緒になつた。それが今の亭主であつた。

おかみさんには子供が無かつた。女の子を一人貰つて育てて、今は十五になるが、後々呂昇はんのやうな娘義太夫にする云つて、文樂の男太夫に本式の稽古をして貰つて居る。きりやうはよく無いが、おかみさんの實の娘だと云つても通りさうないゝ體格で、流石に咽喉の太さが目につくのであつた。おかみさん自身もなかなか顔を見せなかつたが、娘は絶対に客の部屋には出さなかつた。

おつさんおつさんと呼ばれて居るのは、おかみさんの母親の弟で、何をしてる物にならず、身内の者に迷惑をかけながら六十近くなつてしまつた人間で、酔月を利用した上方風の、地下室でもいふ可き風呂場をうけ持つて居る丈で、小遣錢を貰つた時は何處かに飲みに行くし、まづ無しに懐中の空つぽの時でも、何處といふあて無しにうろついて居るやぐざで、其の日其の日をもて餘し切つて居た。

外には若い料理人が一人と、おつぎおりかお米の三人の女中が居た。

「うちの女子家は蟹みたいなもんや。ひつくりかへして見ん事には、雄やら雌やらわからへん。」

と、それがおかみさんの得意の冗談だつた。

二の二

客室は六つあつた。二階の川に臨む方に三つ、反對の往來の方に向いて二つ、階下の一つで、三田の占領して居る川を見下す六疊が一番、其隣の十疊が二番、大貫の居る八疊が三番、三田の部屋と廊下をへだてた八疊が四番、それと檜一重の六疊が五番、階下の六疊が六番だつた。いつたいに夏場は閑散なので、時折一晚二晩泊る人があるばかりで、今では月極の三田と大貫の外には客が無かつた。

日がたつても、氣安く口のきけ無い三田は、宿の者に不思議な人間と思はれて居た。朝、會

社に行つて、夕方歸つて来ると、湯に入つて一本飲んで飯にして、それから机にむかふと、そのまゝ十二時一時になるのが通例で、その間に
お茶を飲む事も無く、手を叩いて人を呼んだ事は一度も無い。時々他所で食事を濟ませて来る事もあるし、夜更に戸を叩くやうな事もあつて、そんな時には屹度深酒の香がしたが、別段足下もふらつかずに、さつさと二階に上つて行く。酔つても酔はなくても、だんまりむつつりで、味もそつても無いのが、みんなにとつて氣づまりだつた。小言も言はず、注文もない、凡そこれ程手のかゝら無い客は曾て無いのだが、それがかへつて窮屈だつた。

「大貫さんみたいな好かん人無いわ。」

「酔ひたんぼで、いやらしい事ばかりいふて。」と口々に悪くいひながら、三田などとは比べものにならない程人氣があつた。酔ふと必ず手を握つたり、抱きついたり、引倒したりするし、夜更でも手を叩いて水を持つて来させたり、茶をいれさせたりするし、用事が遅いと怒鳴りつけるし、おまけに月末の勘定も溜つてゐるのだが、それでも會社の診査用で地方へ出張でもして、數日歸らない事があると、

「大貫さんは何時戻つて見えるのやろ。」

と誰かの口から、さも待侘るやうな言葉が漏れるのであつた。

「あて、三田さん何やらこはいやうな氣がしてかなはん。」

新客好きで、未だ見ぬ客の前に膳を持つて行

く事の好きなお米さへ、三田の御給仕は二三度で懲りて、成る可く外の者に讓る事にしてゐる。「あの眼がこはいのや。あて、あのやうに目ばかりせん眼を見た事無いわ。」

おつぎも多少同感で、直ぐに相槌をうつた。

「けつたいな人いふたらあれへんなあ。何いふても、ふんふん云ふだけで、あれで何が面白いのやろ。」

「用事があつたら何なりといふて下さいと云つても、用事は無いよと、こない云ははるのや。」

「かなはんなあ。」

と投げたやうに云ふものもあつた。

「あれでも女子を見たら、何とか思ははるやろか。」

「阿呆らしい。女子の嫌ひな男つて見た事無いわ。」

勝手な評定をしては笑草にしたあげくが、
「けつたいな人」だといふ結論を繰返すばかりだつた。

二の三

何時迄も三田が「けつたいな人」の域を出ないのにひきかへて、彼の友達田原は、時々遊びに來ては、人氣を一身にしよつて行つた。

田原は三田と同窓であるが、持つて生れた熱情と、生一本の正直がわざはひして、方々の會社に勤めは勤めても、上役と衝突したり、職工の味方になつて株主攻撃の演説をしたりして、紡績會社でも、汽船會社でも、電力會社でも永

續しなかつた。れつきとした父親と、親類うちには立派な政治家や事業家のある御蔭で、今は阪神間に在る車輛會社の専務取締役を勤めて居る。到底下役はつとまらないから、いつそ重役にしていようといふ一門の考であつた。

「匙を投げた結果が重役か。」

と口の悪い三田は友達をいやがらせた。

始めて田原が酔月にやつて來た時は、素晴らしい立派な會社の自動車で乗りつけた。

「三田公ゐますか。」

と玄關に立はだかつて、大きな聲で云つた。

「三田さんですか、いらつしやいますよ。」

飛んで出たのはおりかだつたが、おもてに待つて居る自動車を見ると、叮嚀に膝をついて改めて頭を下げた。

「あるなら上るよ。」

いふかと思ふと靴を脱いで、梯子段を先に立つて上つた。

「あら、そちらではありません。そつちははかりです。」

うしろからついて來たのが、あわてて注意すると、

「あゝさうか、失敬々々。」

とざんぎりの頭を掻きながら眞赤になつた。誰憚らぬ高調子だが、その實ひといはにかみやで、羞しがる度に白皙の面が眞赤になる。

「おい、静かにしないか。外のお客さんの迷惑だ。」

友達の聲をき、つけて、苦り切つた三田が部屋

屋の中から廊下に出て来た。

「外に御客なんかあさうもないぞ。なあ、姐さん。負惜を云ひながら、田原は早くも女中に親しさを示した。

「よう、素晴らしい部屋だなあ。おまけに姐さん達が別嬪と來てるから、お城のねきの高等御下宿とは比較にならないぞ。三田公の月給では、月末が心許ないなあ。」

狭い部屋のなかを、洋服の長い脚で歩き廻りながら、床の間の松に鶴のかけものを、わざと叮嚀に見たり、縁側に出て川の景色を眺めたりした。

「まあ坐らないか。騒々しくて爲方が無い。」

「いや坐らないよ。三田公の新居検分も済んだから、これから新地へ御ともを仰せつける。たまにはうまい酒も飲ましてやらないと、東京にゐる三田公のお母さんに濟まないからなあ。姐さん、こいつのお母さんがねえ、田原さんせがれが大阪に参りましたら、よく監督して下さい。どうぞ一人前の人間になれるやうに目をかけて下さいと、涙を流して頼んだものだ。こんな強突張でも、我子となると可愛いムンださうだ。」

「いゝ加減にしないか。暑苦しいふざけ方はよしてくれ。折角湯から上つたところなんだ。」

「おりが腹を抱へて笑ひこけてゐるので、一層三田は不機嫌になつた。」

あるんだ。」

「いやだ。今日は此處でうまい酒を飲ましてやらう。おりがさん、此の社長さんにお膳を出してやつて下さい。」

「さうか。こいつはいやだと云ひ出すと始末の悪い奴なんだ。よしよし、社長さんも下情に通じとく必要があるからなあ。」

田原は淡泊に同意して、廊下に出て行つたと思ふと、梯子段のところから階下に向つて、大きな聲で叫んだ。

「おゝい、小笠原。自動車歸つてよおし。」

二の四

階下に下りて來たおりがは、帳場にゐる者に面白いお客さんとして田原の事を紹介した。

「立派な自動車に乗つていらつしやつたが、社長さんだつて事です。」

「へゝえ、社長さん？ 三田さんの會社の社長さんか。」

おかみさんも乗出してきいた。

「その癖ちつともたかぶらない、面白い事ばかり云つてゐて、三田さんの事でも三田公三田公だつてさ。」

おりがは苦蟲を噛みつぶしてゐる三田の様子迄も想ひ出して、外の者をうらやましがる程笑つた。

御膳が揃ふと、

「あても行て見よ。」

お米もおりがの後について、一つ宛連んで二

階に上つた。

「いよう、こいつあ驚いた。俺も此のうちに宿替しよう。」

田原は仰山に後へ身を反らした。羞しさをまぎらす爲めには、どうしても冗談口をきかなくはゐた。まれないのであつた。

「なんですの。あての顔になんぞ書いておまつか。」

自分のきりやうに十分自信のあるお米は、うすすり化粧した顔をあかりの方へ向けた。

「書いてあるとも。シヤンと書いてある。」

「いやあ、悪いお方。そないな事ははれるのやつたら、あつちへいに来つさ。」

わざと立上らうとするのを、

「ううう、待つてくれ、待つてくれ。もう何も云はんからお酌お酌。」

拜むやうな手つきをして引とめて、盃を取上げた。二人の女は、それが社長さんだと思へば一層をかしくて、脇腹を抑へて笑ひ倒れた。

三田は額に八の字を描いて、黙々として盃を重ねてゐた。彼は友達の肚の底迄知り盡してゐた。此の男は、正面の切れない人間なのだ。と

れかくしに下手な輕口を叩いてゐるうちに、止度が無くなつて、自分でも困つてゐながら、きれいに切上るうでが無い。その弱味をかくす爲めに、又ふざける。俺のやうな重苦しい根性もよくないが、此の男の態度も面白くない。――

彼はそんな事を考へてゐた。

「三田公、此の酒は飲めるよ。お前の宿だから、

どうせ高等御下宿程度だらうとたかをくゝつて来たが、こいつお掘當てたぞ。實際いゝ酒だ。」

「そんならもう一つ。」

「いかにいかに、俺はお米さんのお酌でなければ飲まないよ。おりかさんは三田公の方にツイてやつてくれ。」

「あらやだ。社長さんはそんな悪口なんかいふもんぢやありませんよ。」

「あんだ、三田さんとこの社長さんだつつか。」

「どうも様子が社長らしく無いとも思はれるし、社長だとするとお酌甲斐があるやうな氣もして、お米は膝を乗出した。」

「うむ、三田公んとこの社長さ。こいつの首を切らうとも、月給をあげてやらうとも、此の胸三寸にあるんだ。」

上着をぬぎ捨てたホワイト・シャツの胸を叩いて見せた。

「ほんまだつか、三田さん。」

「ほんまだ。」

三田は面倒くささうに首を縦に振つた。

豪酒の三田は何時迄も盃を放さなかつたが、田原は急に酔つてしまつた。

「さあ、外にも別嬪があるなら連れて来い。お家はほんも御寮さんも娘はんも呼んで来い。何んでえ、何んでえ、三田公。下らねえ面あしやがつて、眼玉ばかり光らせてやがら。」

わけのわからない事を、本性たがはない生酔ひで、持前の甲高い聲で怒鳴つてゐたが、夙に分量を過ぎた酒に背骨がしやんとしなくなつて、

いきなり眞後にぶつ倒れたまゝ、肝をかいて寢てしまつた。

二の五

田原が三田の勤務先の社長で無い事はわかつたが、立派な車輛會社の重役だといふ事で、少なからず宿屋の尊敬をうけ、そんな地位の人があゝ迄碎けてゐるといふのが、一段と人氣を集めた。その御蔭は三田もかうむつた。車輛會社の重役で、自動車を乗廻す人を友達に持ち、對等のつきあひをして居るといふのが、何となく重味をつけ加へる事になつた。

「社長さんどないしてはりまんのやらう。面白い方だんな。」

徹頭徹尾、別嬪でシャンダトテ・シャンダとおだてられたお米は、殊に田原鼎負だつた。

「ああ見えて、あの男程眞直な人間も少ないし、あれ程内氣な奴も無いんだぜ。」

當の本人のゐない時は、三田はしきりに其ひととなりをはめたが、その批評は女達には信じ難る事ばかりだつた。正直だとか、品行方正だとか、涙脆いとか、人がよすぎるとか、品行方正だとかいふのは、みんなの期待する事では無かつた。それよりも、氣さくだとか、さばけてゐるとか、冗談ばかりいふとか、面白い人だとか、さう云ふ美德であり度かつた。

「いつしよに學校を出やはつたのやさうやが、矢張出世する人は何處か違ふたるなあ。」

帳場にゐるおかみさん迄も、三田と比べて田

原の性質をほめ度がつた。

その田原が二度目の訪問は、全くみんなの待遇しがるところだつた。

或晩遅く、田原から三田に電話がかゝつて来た。

「もしもし、僕三田です。」

「あんだ三田さんだつか。えらいお久しおまんなあ。」

と答へたのは女の聲だつた。

「田原さんでは無いのですか。」

「田原さんも此處にゐてはります。あんだ、あてだんが。」

北の新天地で、蟬とあだなを取つた女だつた。田原の會社の取引先の宴會で、これから二次會といふところだが、つまらない連中だから逃げ出して、外のうちでゆつくり飲むから、出て来いといふ電話だつた。

「今晚は駄目だ。僕は書物が忙しいから失敬すると田原に云つてくれたまへ。第一もう十時過ぎだぜ。」

「十時だつて十二時だつてかめしまへん。三田公とも云はれるものが出て來んなんで卑怯だつせ。」

何時もの事だが、蟬は十二分に酔拂つて居るらしい。

「あゝ卑怯だとも。さよなら。」

三田は面倒くさくなつて、さつさと電話を切つてしまつた。部屋にかへつて書きかけの原稿を續けたが、間も無くおもてに自動車がとまつ